

【研究ノート】

Q：ラテン語写本“HORAE”とは？

A：『時禱書』即ち『小聖務日課』！

——日本唯一の「中世ラテン語写本」“HORAE”  
(古川美術館所蔵)の解読研究——

吉 田 聖

目 次

はじめに：この写本との出会い。

1. 解読後の正確な名称は『小聖務日課』！
2. 挿絵 12 枚は何のために？
3. 人間味のある写本ミス！
4. 10 項目あるこの写本の中身。
5. 解読作業中の新発見について。
6. 時課の構成について、「朝課」の例。
7. 『時禱書』の解読結果を踏まえて。
8. カトリック教会と「祈りのかたち」。

おわり：本書の全訳出版へ向けて。

はじめに：この写本との出会い。

本書は、15世紀初頭、フランスで製作された、手書きの写本だそうで、『時禱書』『ブシコー元帥の画家の時禱書』『ブシコー派の時禱書』などとも呼ばれ、とても小さなラテン語の「祈禱書」（カトリック教会・信者個人用）である（本稿では、以下簡潔に『時禱書』または、本書、を使う）。B6判メモ・カードよりも小さく、「はがき」よりはひとまわり大きい程度（167×120ミリ）である。「祈禱書」が「美術事典」にも掲載されているのは、美しい「カラー挿絵 12 枚」があちこちに挿入されているからで、この種の写本に複数の名前が付けられている理由は、どうやら「製作者、または注文

主の表記法」について美術史には諸説があるためらしい。「カラー挿絵 12 枚入り」の本書の類は、全世界に 35 冊しか残っていないので、中世の社会史、文化史、美術史にとっても、貴重な資料となっている。特に「カラー挿絵 12 枚」が美しいので、美術愛好家の間では貴重な「芸術作品」と見做されている。日本にはたった 1 冊だけ、名古屋にある。古川美術館所蔵で、評価額は 4000 万円也。／ という骨董品の代物である<sup>(1)</sup>。

特別展「祈りのかたち」(95 年 11 月 3 日～96 年 1 月 28 日)を開催することになった古川美術館では、その準備作業の一つとして、本書の「解説可能な人」を以前から捜していたが、なかなか見つからないで困っていたらしい。1995 年 8 月中旬のある日、同美術館・学芸員 Y さんの親戚にあたる近藤雅広師(レデンプトール会司祭、「心のともしび運動」理事長)の仲介で「解説依頼の電話」が私にもかかってきた。早速、OK の返事をした。すると間もなく、依頼状と共に解説対象資料の一部分(「カラーの挿絵 12 枚」等)が古川美術館から届けられた。この種の資料は、稀少価値大であり、中世の社会史・文化史・美術史等のさまざまな立場や角度から、すでに、かなり詳細な研究がなされているが<sup>(2)</sup>、「古川美術館所蔵の『時禱書』そのものは門外不出なため、まだ誰も詳しい研究に着手していない」とのことだった。そこで私は頼まれついでに「全体像について」、この際、徹底的に研究してみようと思い立った。

研究論文作成にあたり、誤解のないように、まず今回の私の立場を明らかにしておきたい。私の研究立場は、上述の中世の社会史・文化史・美術史の、いずれの立場や観点とも異なっている。事実、私は単なる歴史的・文献研究者ではなく、カトリックの信仰と教えに立脚し、長年、本書の原版ともいべきラテン語の大『聖務日課』(ラテン語版、全 4 巻、6000 頁以上)を使って、毎日、祈ったり歌ったりしてきた一人のキリスト信者であり、現在はカトリック司祭、大学教員である。毎日、大学生対象にラテン語の授業担当のかたわら、おもに 3 世紀の聖キュプリアヌスのラテン語文献解説研究・翻訳出版等に従事している者である。従って、本件の解説研

究には、かなり条件が整っているわけである。さらに「美術事典」等より予備知識の収集のため、慣用句、解説の類は「○○史的文献・資料」として一読してみたが、必ずしもそれを前提にしていない。解説書の比較検討や、孫引き引用、変わった意見紹介等は極力さけて、これまで独自に研究し蓄積してきた「ラテン語ならびにキリスト教」関係の知識と経験と資料を根拠にしなが、『時禱書』解説研究につとめた。そして、95年9月末現在までに、解説できた内容を、ありのまま、ここに事実として示すことにした。それによって、関係者をはじめ多くの人々がこの『時禱書』について、より正確な内容を把握し、正しい理解を深められれば幸いである。

### 1. 解説後の正確な名称は「小聖務日課」!

さて、本書のコピーを手にしてまず感じたことから始めることにしよう。不思議なことに、皮製の立派な表紙はちゃんと付いているのに、表にも裏にも中にも、どこにも「タイトル」が記されていない。収納箱に書かれてあったという、“HORAE”とか、『時禱書』等の名前は、後から勝手に付けられた名称である。さらに、目次も索引もない。最近の本ならば、たいいてい巻末には著者名・発行元・発行年・価格などを書いた「奥付け」が付いていて一目瞭然だが、本書にはそれらしきものも付いていない。所々、Ant. (Antiphona の略、「交唱」)、Ps (Psalmus の略、「詩編」)、V (Versus の略、「唱句」) などといった略語が赤い文字で挿入されているだけだ。聖書の引用箇所「書名」もなければ、「章・節」等のアラビア数字というものも、一切付いていない。「ないない尽くしの正体不明!」には、少々驚いた。と同時に「情報不足だ。果たして、こののっぺらぼうみたいな、小さな怪物の正体を突き止めることができるだろうか」と思った。今なら当たり前なのに、「頁さえ打ってないのはなぜだろう」という単純な疑問が頭から離れず、いろいろな資料を調べてみたが、『大百科』(丸善エンサイクロペディア、1994年、「数学」の項)に、やっとその答えが載っていた。「今一般に使われる数体系はアラビアの数体系を採用したもので、そのアラビア数体

系はインドの考え方をもとにしている。……0と1から9までの基本的な数字を使って、すべての数が組み立てられる。この10を基数にした10進法は1600年にはほぼ全世界で使われるようになった」（1087頁参照）とあった。アラビア数字（1・2・3）の10進法が世界中に普及したのは「1600年から」とあり、実はこの『時禱書』のできた1412年頃には、数字（1・2・3）がまだ普及していなかったのである。これで頁数とか章・節の数字がどこにも付いていないことも、すんなりと納得できた。当時の文献の数え方として、頁のかわりに「枚」（葉、<sup>よう</sup>folio）と、「表側」（recto）、「裏側」（verso）という表現が用いられるようになったが、この写本自体には何も記入されていない。

本書の内容解読作業の手順として、まずは独特のゴシック字体の（かなり読みにくい）筆記文字を、一つ一つ別紙にローマ字体に直して筆写することから始めた。次に、種々の別なラテン語文献・資料等を使って全体182枚（364頁分）を注意深く照合・解読する作業を行った結果、ほとんどの部分（90%以上）の「典拠の特定」ができた。最初の2つの「聖母マリアに対する祈り」（18～25まで、約18頁分）だけは、別の資料でも典拠を見つけないことができず、そのまま解読して和訳作業も終了している。その他の箇所のと訳も順次進行中である。

本書はたいてい、どの美術事典にも『時禱書』という名で掲載されている。しかし正確に言えば、大小ふたとおりある『時禱書』を区別して記載する場合は『小・時禱書』である。従来の名称記載事項は訂正する必要があることをまず指摘しておきたい。

本書の収納箱にはラテン語で、“HORAE”「時」（複数形）と記されていることはすでに述べたが、『時禱書』などという訳語はどこから考案されたのであろうか。本書の専門用語および訳語としては、正式な教会ラテン語名は、“HORAE”，ではなく、“OFFICIUM DIVINUM”，その訳語としては『聖務日課』，英語では，“Divine Office”，さらにまた、「小聖務日課」は，“OFFICIUM PARVUM BEATAE MARIAE VIRGINIS”，『童貞聖

『マリア小聖務日課』、略して、ただ『小聖務日課』とも言う。英語では、“Little Hours of the Virgin”と言う。1972年のローマの大改訂後は、“LITURGIA HORARUM”、『時課の典礼』、英語では、“Book of the Hours”, “Liturgy of the Hours”, とも言われている<sup>(3)</sup>。

## 2. 挿絵 12 枚は何のために？

さて、1番目の挿絵「受胎告知」(27表<sup>おもて</sup>)から、順次解説を試みたところ、この挿絵の下のラテン語文はすぐに分かった。昔、ラテン語で祈ったり歌ったりした「聖務日課」の「初めの祈り」の唱句、“Domine, labia mea aperies.”、「神よ、私の口を開いてください」と、それに続く、“Et os meum annuntiabit laudem tuam.”、「わたしはあなたを賛美します」という「祈りの決まり文句」であって、挿絵「受胎告知」の説明文ではなかった。(本稿末尾の挿絵参照)。一日の最初の祈り「朝課」(後述する)の初めの頁に当たるだけであった。

ところが、古川美術館では特別展の展示に備えて、カラー挿絵 12 枚全部の「ハイ・ビジョン」撮影を行い、この挿絵の箇所に次のような短い説明文を独自にこしらえた。

「さて、華麗な 12 枚の挿絵は『受胎告知』で始まります。ナザレのおとめマリアのもとへ、突然、天使が舞い降りてきて、マリアが神の子を宿したことを告げました。白百合はマリアの純潔の象徴。頭上には聖霊の鳩。実物は、豆粒のように小さなマリアの頬にもほんのり赤味がさしています。左上に見えるのは、父なる神。背景のステンドグラスは、金をたっぷり使って、本物さながらのきらめきです。天使の祝福の言葉『めでたし聖寵満ちみてるマリア……』は、巻紙の中に書かれています。(欄外のアーカンサスの葉の様式から 1412 年頃の作といわれています。)」(1995 年 9 月 27 日付のファックス参照)。

また、2番目の挿絵「聖母のエリザベト訪問」(47表)の下には、各時課の初めの唱句、“Deus, in adiutorium meum intende.”、「神よ、わたしを

力づけ」, “Domine, ad adiuvandum me festina.”, 「急いで助けに来てください」という「祈りの決まり文句」が載っていて、これも挿絵の説明文ではなかった。「賛課」(後述する)の初めの頁に相当するだけであった。しかし、古川美術館は美術史的な慣用語を用いながら、簡単な説明文を創作した。すべての挿絵の下のラテン語文を解読できたが、最後(12番目)の挿絵(138表)、「死者のための晩課」の下のラテン語文だけは、前述のものとはちょっと変わっていた。Antiphona: Placebo. Dilexi, quoniam exaudiet Dominus vocem orationis meae. 「交唱」: Placebo (最初の単語のみ記入), そして、「詩編 114(116), 1」の冒頭「わたしは主を愛する。主は嘆き祈る声を聞き……」という文面が初登場したが、要するに、これも祈りの言葉であって、挿絵の説明文ではなかった。「死者のための晩課」の初めの頁を示すだけであった。結局、「カラー挿絵 12 枚」の下のラテン語文はすべて挿絵の説明文ではなかった。つまり、「絵と文」の両者には「直接なんの関係もないこと」が判明した。しかし、古川美術館はこれら 12 枚の挿絵すべてに、後ほど短い説明文を付けたのである。古川美術館の依頼事項として、挿絵部分の下にあるラテン語文、および「本文のつながり」についても調べてみたが、後述する種々の解読内容から明らかなように、「挿絵が本文を暗示しているもの」は終わりから数えて合計 4 枚あったが、その他の挿絵は、要するに、本文とは無関係なのだ。最初の勉強会の際にまずそのことを伝えたが、解読依頼主・古川美術館側としては、このような返事は意外であったらしい。「挿絵と文章とは何か関係ある!」と思いついていた節がありありと窺われた。

### 3. 人間味のある写本ミス。

西洋文化の背景には、“Errare humanum est.”, 「エラーは人間らしいことだ」というラテン語の格言がある。ハイテク技術の結晶であるコンピュータでさえ、「エラー・チェック」が欠かせない事実からも明らかなように、人間のやることや作った物には、古今東西、完全無欠な物など一つもない。

周知のことだが、写本にも、必ずエラーやミスがある。本書は、「誰が、どこで、どうやって、いつごろ作ったのか(推定 1412 年頃)」等々、この『時禱書』の外面的装飾、状況証拠的な事柄等については、私の関心事ではないので、美術史関係の専門研究家に委ねることにする。

肝心な本書の中身について、ラテン語文を次々と解説していくにつれて、まず気がついた点は、この写本作者は、疲れていたか、眠たかったのか、それとも「うっかりミス」なのか、理由はさておき、随所に、いろいろなミスやエラーをやっている、ということである。現在までの研究で、少なくとも 10 個以上は見つけた。これは、別に珍しいことでもないし、ことさら取り上げて批判するつもりでもない。このことによって、この写本の価値が下がってしまうこともないと思う(日本の文化でも、「弘法も筆の誤り」「釈迦も経の読みちがい」と言うし、西洋では、“Quandoque bonus dormitat Homerus.”、「ホメルスも時には居眠りをする」と言う)。誤字・脱字のミスやエラーの類はよくあることで、この『小時禱書』の中から、頁順にいくつか例を拾いあげて、コメントしておきたいと思う。

- ① 92 表 5 行目には、「交唱」の一節。特定!）“necessitatibus; meis sed”<sup>(4)</sup>、と書いてしまったから「間違いに気付いた」らしく、当時は「ミス・ノン」みたいな便利なインク消しはなかったし（牛皮紙に書いたら染み込んでしまい、そう簡単には消せなかったのではないか）、余分な単語、“meis”，の真ん中へんに横線一本すつと引いて、次の単語に続いている。
- ② 144 裏 6 行目（詩編 145 編。特定!）に、“Regnabi”，とあるのは、“Regnabit”，というふうに未来・3 人称・単数形の語尾 (t) が必要であるが、なぜか欠落している。
- ③ 145 表 5 行目の「死者のための結びの祈り」（以下、④⑤とも特定!）では、“quam”，（亡くなった方の「名前」を入れて祈る箇所に関係していて、死者が「単数」である場合，“animam”，の関係代名詞・「女性・対格・単数形」）のはずなのに、“quas”，（同・「女性・対格・複数

形)」とある。死者が「複数」の場合は、当然、原文の通りになる。写本作者は、複数を想定したのであろうか。

- ④ 同じく末尾 8 行目も、“*consortes*”，と複数形があるが，“*consortem*”，と単数形が正しい形である（いずれも，“*consors, ortis, f.* 仲間，参加する者等の意）。
- ⑤ 149 表 3 行目（「交唱」。特定！），“*Dirige, Domine.*”，に続く言葉，“*Deus meus, meus. . .*”，「わが神よ」と 1 度でよいはずの，“*meus*”，が 2 度も書いてある（しかも，訂正されないままになっている）。
- ⑥ 158 表 6 行目（詩編 26，3。特定！），“*Si consistant adversum me*”，「彼らがわたしに対して（陣を）敷いても……」の後続部分の 10 ケの単語，“*castra, non timebit cor meum. Si exurgat adversum me praelium*”，「わたしの心は恐れない。わたしに向かって戦いを挑んでも」までが全部ストーンと落ちてしまい，“*in hoc ego sperabo.*”，「わたしには確信がある」と結んでしまっている。ここは、実は、上下 2 行とも酷似した単語が並んで始まる詩編の文章なためか、後半部分をうっかり間違えて（？）1 行分そっくり飛ばして、別な箇所を写してしまい、あとで気がつかないでいるらしい。
- ⑦ 163 裏 2 行目（詩編 39，12。特定！）の，“*miserati \_\_\_\_\_*”，という妙な単語は、実は語尾に相当する（下線部分）が、なんと「余白のまま」になっているのである。本書は「後ろの飾り書き」という独特なやり方でカラー模様の飾りを付けて、どの行の末尾も「余白は全部埋め尽くされている」のに、ここだけ文の途中で「真っ白」なのが余計に目につく。当然，“*-ones*”，「あわれみを」という対格・複数形になっているはずである。こういうミスは本書では、きわめて珍しい。
- ⑧ 165 表 10 行目（詩編 40，7～8。特定！），“*Et sic ingrediebatur*”，に続くはずの，“*ut videret vana loquebatur*”，「見舞いに来れば、彼らはむなししいことを言う」という 4 語が「抜けたまま」、次の別な文章につながっている。



- ⑨ 上の文⑧中の，“sic”，「このように」は，“si”，「もしも」が正しい単語である。
- ⑩ 上の文中の，“congregavit”，は過去形「集まった」ではなく未来形の，“congragabit”，「集まるだろう」と“v”ではなく“b”が正しい。このように同じ頁に3か所もあるのも、珍しい。恐らく、写本作者（たち）も疲れていたのであろうか。書き写し間違いか、聞き間違いか、のいずれかであろう。
- ⑪ 163 表下から4行目以降（詩編 39, 11. 特定!）が、本書で一番顕著な「ビッグ・ミス」である。“Non abscondi misericordiam tuam et veritatem tuam”，「あなたの慈しみとまことを隠さずに私は語った」までは正しいのだが、次の，“et salutarem tuum, Domine.”，「あなたの救いをも、主よ」はどこを写したのか「間違い」である。そこで、前の文はそのままにして消さないで、もう一度最初の言葉から，“Non abscondi misericordiam tuam et veritatem tuam”，までを略語も交えて「書き写し直した」あとで、正しい続きの言葉，“a consilio multo.”，「大いなる集会で」を書き加えているのである。しかも通常、文頭の「頭文字は左端から」書き始めるので、「カラーの飾り付き大文字」は左端にきれいに揃っているのに、なんとここだけは大胆に(?)、最初から「2番目」の場所に大文字で書き始めているで、出っ張っていて、「おや、これはおかしいぞ!」とすぐにミスに気が付いた次第である。しかも、無造作に合計11個の単語を「そっくりそのまま」2回も書き直しているのには驚いた。おまけに、削除を意味する「訂正の横棒」も引き忘れた、「ダブル・ミス」らしい。だから、本書の持ち主は、それとは知らずに全部（間違い箇所も続けて）読んでしまったに違いない。以上、この『小・時禱書』の、人間味あふれるミスやエラーを指摘し訂正をした次第である<sup>(5)</sup>。いずれにせよ、この一冊の写本(文字の部分だけでも)を作るために、どれほどの時間と労力、エネルギーが費やされたことであろうか。前述のように、実際に、この文字を一

一つ一つ、別紙にローマ字体で筆写する作業等をほとんど毎日、約10時間、連続約1か月半、合計300時間以上もやってみて、私もその苦勞の一端をしみじみと実感できた。同一人物が、「文も絵」も一人で担当したとは思えないが、「細密画・カラー挿絵12枚」の製作にも、文字以上に相当な時間を要したに違いない。

長々と、この『小・時禱書』のアラ捜しをして、ちょっとケチをつけてしまったかも知れないので、ここで「感心したこと」も一言。本書は、実に巧みな「略字・略語記号」をたくさん考案して、「はがき」よりひとまわり大きいだけの1頁を、うまく利用している。例えば、①3文字の、“mia”，この上に～を付けただけで、これを4倍の12文字の単語，“misericordia”，「あわれみ」と読ませ、②同様に3文字の，“Dne”，の上に～を付けて2倍の，“Domine”，「主よ」，③他にも2文字の，“qm”，の上に～をつけて、3倍の6文字の，“quoniam”，「というのは」，に使っているのである。④3文字の，“Dus”，の上に～を付けて7文字の，“Dominus”，「主は」とし、⑤4文字の，“pecis”，の上に～を付けて2倍の8文字の，“peccatis”，「罪、に対して(によって)」として使っているのである。他にもたくさんあるが、「組合せの略字記号」等は、逐一、私の機械で写すことができないので、これくらいにしておきたい。

ここで、もう一つだけ特徴的なことを指摘しておきたい。この写本では、困難な「ハヒフヘホ」等のフランス語発音上の配慮であろうか、ドイツ語系なら“mihi”，「ミヒ」（「私に」の意）という語形・発音になるところを、代わりに、常に「ミキ」と発音させるため、“michi”，（間に必ず，“c”，が挿入された語形。“nihil”，「ニヒル」，英語“nothing”，に相当する単語も同様に，“nichil”「ニキル」）となっている。この点が、この『小・時禱書』よりも1000年も前の、私の長期研究対象の文献（3世紀の聖キュプリアヌス著作等）とは違う単語の表記法であると感じた。

#### 4. 10 項目あるこの写本の中身。

本書は聖職者が毎日唱えるのに使っている分厚い「大・聖務日課」（ラテン語版は全4巻、約6000頁以上）ではなく、その15分の1程度の規模に縮小された、『小聖務日課』、即ち一般信徒用の『童貞聖マリア小聖務日課』（全1巻）の一種であることはすでに述べた<sup>(6)</sup>。実はカトリック教会では、中世より第2ヴァチカン公会議にいたるまでの約500年間、この種の『小・聖務日課』を、おもに一般信徒の「個人的な信心業」の一つとして認め奨励してきたのであった。第2ヴァチカン公会議の『典礼憲章』<sup>(7)</sup>に基づく改革は、「ミサ」および「聖務日課」にも当然関係してくることになり、実際に1972年以降、ローマ発行の大改訂版『聖務日課』（ラテン語規範版、全4巻、約6000頁）が日本でも抜粋・翻訳され、新しいコンパクトな「聖務日課」として『教会の祈り』（全1巻、約1370頁）という名前で出版された。この時点で、この新しい『教会の祈り』が『童貞聖マリア小聖務日課』に取って代わり、共同で歌ったり唱えたり、個人でも唱えるようになり今日に至っている。

さて、本書の構成等であるが、「カレンダー」（典礼暦12か月）から始まって、「聖務日課」と呼ばれる一日8回の定時の祈り<sup>(8)</sup>、即ち「朝課、賛課、一時課、三時課、六時課、九時課、晩課、終課」が順序よく配列され、最後の、「死者のための聖務日課」まで、合計10項目から構成されていることが特定できた。

##### 1. 「カレンダー12か月」（枚数番号：1～12まで、24頁分）

降誕祭、各月ごとの聖人等、「固定祝祭日」だけが記載されていて、復活祭等、「移動祝祭日」は一切記載されていない。このことから、本書が「小・聖務日課」であると判断できる。ちなみに「3月の典礼暦」（3表～4裏）に掲載されている聖人名等を解説してみたが、以下の通りになっている。

3月1日聖アルビーノ司教証聖者

3月7日聖ペルベートゥアと聖フェリチタス殉教者

3月9日聖40人殉教者

3月12日聖グレゴリオ教皇殉教者

3月21日聖ベネディクト修道院長

3月25日「受胎告知」（現在「神のお告げ」と言う）

以上、5人の聖人と「受胎告知」の合計6日分だけしか掲載されていない。ちなみに、正しい人・ヨゼフに関する祝日はまだ一つも祝われていない。当時は聖母マリアに対する信心のほうがか盛んであったらしい。ローマの「聖務日課」に聖ヨゼフが登場するのはこの『時禱書』よりも70年以上もあとの1482年頃からであり、そのミサ典礼文はさらに遅れて1505年頃できたらしい。中世では、聖ヨゼフは単独で描かれることはきわめて稀であり、たいてい、聖母と幼子と共に（本書中にも、「降誕」「エジプト避難」などの挿絵に、“Aureola”「輪光」〔リンコウ。聖人の印である金色の光りの輪。仏教では「光背」〔コウハイ〕と言う〕がまだ付かない姿で、脇役として、慎ましく登場している。（聖ヨゼフの祝日は、後ほど3月19日、5月1日に制定され今日に至っている。）

2. 「4つの福音朗読箇所」（枚数番号：13～17まで）。

いずれも、4つの祝日の「ミサの福音朗読箇所」そのものであることが特定できた。

- (1) 「ヨハネ福音書 1, 1～14」（降誕祭第3ミサの福音。枚数番号：13～14まで）
- (2) 「ルカ福音書 1, 26～38」（「神のお告げ」の祝日のミサの福音。14～15まで）
- (3) 「マタイ福音書 2, 1～12」（「主の公現」の祝日のミサの福音。15～17まで）
- (4) 「マルコ福音書 16, 14～20」（「主の昇天」の祝日のミサの福音。17表と裏まで）

3. 「聖母マリアに対する祈り」（18～25まで）。

- (1) “Obsecro te……”「聖母マリアよ、切にお願いします……」（18～21

まで)

司祭がミサの後に唱える「十字架上のキリストに対する祈り」もこれと同じラテン語の言葉で始まるので、こういう表題の付け方は、まぎらわしい。この祈りは、“Obsecro te, Domina.”、ともう一語、“Domina”，を追加したほうがよい。それにしても合計 475 位の、句読点のない単語を並べた、長い、長い祈りである（解説・和訳済み）。

(2) “O intemerata” 「おお、汚れなき聖母よ……」(21～25 まで)

古川美術館からの資料中、この祈りの説明文には「オ・インテメラ」と「タ」抜きでカタカナで書いてあった。一見して、これは「インテメラータ」であり「タ」が脱落していると指摘した。後ほど原文コピーが届いた段階で、確認・照合してみたところ、やはりそのとおり、「インテメラータ」、「intemerata」、「けがれなき」という形容詞（女性形・呼格・単数）であった。これも、約 500 位の単語を羅列した長い、長い祈りである（しかし、マタイ 6, 5～8 によれば、「祈るときは、くどくどと述べたりするな」とキリストは言われており、聞き入れられるのも、その祈りの「長さ」のゆえではないはずなのだが。テレビなどなかった時代だから、たっぷり祈りに時間を使ったのであろう。解説・和訳済み）。

4. 一日分の「聖務日課」(27～94 まで)。この部分が本書の「中心部」である。例の「カラー挿絵 12 枚」も下線付で記入しておいたが、この部分に集中している。

- (1) 「朝課」(Ad Matutinum) (27～46 まで)。扉 (27) に「受胎告知」の挿絵 (1 枚目)。
- (2) 「賛課」(Ad Laudes) (46～59 まで)。扉 (46) に「聖母のエリザベト訪問」の挿絵。
- (3) 「一時課」(Ad Primam) (60～65 まで)。扉 (60) に「キリストの降誕」の挿絵。
- (4) 「三時課」(Ad Tertiam) (65～70 まで)。扉 (65) に「羊飼いへの告知」の挿絵。

- (5) 「六時課」(Ad Sextam) (70～75 まで)。扉 (70) に「三人の占星術の学者 (マジ) の礼拝」の挿絵。
- (6) 「九時課」(Ad Nonam) (75～79 まで)。扉 (75) に「幼子イエスの神殿奉献」の挿絵。
- (7) 「晩課」(Ad Vesperas) (80～88 まで)。扉 (80) に「エジプトへの避難」の挿絵。
- (8) 「終課」(Ad Completorium) (88～94 まで)。扉 (88) に「聖母の戴冠」の挿絵。

5. 典礼暦に従って変更すべき箇所について。(94～102 まで)。補足的な箇所。

- (1) 「晩課」についての変更指定箇所 (94～96 まで)
- (2) 「朝課」についての変更指定箇所 (96～99 まで)
- (3) 「賛課」についての変更指定箇所 (99)
- (4) 「一・三・六・九の各時課」についての変更指定箇所 (100)
- (5) 「賛課」についての変更指定箇所 (101～102)
- (6) 「聖母賛歌」, “Regina Caeli” 「天の元后」(復活節の歌) (102)

6. 「死者のための聖務日課」(103～124 まで)

- (1) 「痛悔の七詩編」(103～115 まで)。扉 (103) に「祈るダビデ王」の挿絵。

ダビデの作った詩編が7編(6・31・37・50・101・129・142)番号順に並べられている。この詩編の祈りを唱えながら、死者のために、罪のゆるしと永遠の安息、終わらなきいのちを祈り願うのである。ダビデ王も自らの罪を悔いて祈ったのにあやかって……。

- (2) 「諸聖人の連禱」(115～124 まで)

死者のために、さらに「諸聖人の取次ぎ」を祈り願って、いろいろな聖人の名前を列挙して祈り、その都度、右端の略字, “Or.” (とだけ記されている祈り) “Ora pro nobis”, 「われらのために祈りたまえ」と結ぶ。この時代には、今とは違った聖人名、地方固有の聖人名などが出てきて、当時

の信心の傾向も推察できるので、比較研究してみるとおもしろいと思う。ここにも、聖ヨゼフの名前は一度も出てこない。

#### 7. 「聖十字架称賛の聖務日課」(124～131 まで)

扉(124)に「十字架上のキリスト」の挿絵。古川美術館の文献では「磔刑」とある。カトリック教会では、通常は「磔刑」〔タクケイ〕とは使っていない。ここには詩編以外の「固有部分」のみが掲載されているので、枚数的にはそう多くはない。ここで興味深いのは、「一・三・六・九」の各「時課」「晩課」「終課」の各箇所短い文章が掲載されていて、その時課「固有の時間帯」とキリストの受難の「各場面」が具体的に対応するかたちで示され、適切にあてはめられていることである。例えば、

- (1) 一時課の時間(朝7時頃)には、キリストがピラトの許に連行され尋問を受けたことを想起し、
- (2) 三時課の時間(朝9時頃)には、キリストが人々から「十字架にかけろ」と罵声を浴びせられことを黙想する。
- (3) 六時課(正午頃)には、キリストが十字架に釘付けられたこと、
- (4) 九時課(午後3時頃)には、キリストが大声を上げて叫び、おん父にその魂を委ねて息絶えられたことを思い起こし、
- (5) 晩課の時間(日没の頃)には、キリストが十字架より降ろされたこと、
- (6) 終課の時間(就寝前)には、キリストが新しい墓に埋葬されたことを黙想して、一日の仕事や業をすべて終え就寝する。

ここに、いみじくも、「十字架の苦しみ、およびキリストの救いの神秘」の事実と、その功德に参加し、永遠のいのちに到達するように励むキリスト信者(聖職者・一般信者)たちが、日々の聖化のために自主的に唱える「小・聖務日課」の各時課の意義が、きれいにまとめられ、明解に説かれていると思った。

#### 8. 「聖霊の聖務日課」(132～137 まで)

扉(132)に「聖霊降臨」の挿絵。「賛課」と祈り、「一・三・六・九」の各時課、「晩課」、「終課および結びの祈り」等、変更箇所のみ掲載されてい

るので、枚数的には多くない。

9. 「死者のための晩課」(138~145 まで)

扉(138)に「死者のための晩課」の挿絵(最後の12枚目)。古川美術館の文献に「お葬式のミサ」とあるのは「孫引き」による間違い。他の美術事典にも同じ間違いが掲載されているから。本書は「ミサ典礼書」ではないし、挿絵の内容からみても、「ミサ」とは関係ない。この箇所<sup>8)</sup>の解読で判明したのは、詩編114・119・120・129・137と続き、福音の歌(“Magnificat”=ルカ福音1, 46~55参照)、最後は「結びの祈り」で終わる「晩課」である。挿絵の説明に「死者のための典礼」という訳語も適当である。

10. 「死者のための聖務日課」(145~182 まで)

上記の「死者のための晩課」(138~145 まで、約16頁分)も本来ならば、この部分に属するものであると考えられる。それを合計すれば、8枚(16頁分)+38枚(76頁分)=46枚(92頁分)となる。本書182枚の「約4分の1」に相当するほど長い部分を「死者のための聖務日課」に使っている。このことからみてもカトリック教会が、共同体としてはもちろんのこと、個人的にも、死者を大切にしていること、その罪のゆるしと永遠の安息、終わらなきいのちを切に祈り願うように奨励していたことがうかがわれる。この箇所は大部分、「グレゴリオ聖歌集」に楽譜付で掲載されている。

(1) 「朝課」(145~170 まで、約51頁分)

(2) 「賛課」(170~182 まで、約25頁分)

以上が本書の主な内容10項目である。「挿絵12枚」の挿入箇所(下線付)は結局、各時課の最初の頁を示す「扉」「区切り」であることが、ここで一目瞭然となった<sup>9)</sup>。

## 5. 解読作業中の新発見について。

ところで、「製本技術」の肝心なことであるが、頁数が全く記入されていない182枚もの、はがき大くらの小さな牛皮紙を、1頁も間違わずに、裏表とも、順序よく重ねて一冊の本のかたちにするにはどんな工夫がなさ



れていたのか。

「大学時代にラテン語を学んでおけばよかった」としきりに後悔していた学芸員2名と、3回目の勉強会の最中にその「製本技術」に関する新発見をしたので、その経緯を説明しておきたい。実は「この『時禱書』には、34裏の下（欄外）に変な単語が3つ書いてある」という指摘を前回の勉強会で受けたので、「他にも似たようなものがないか調べて、あれば資料として持参してくれるように」と頼んでおいた。そして3回目の勉強会で受け取り、早速全資料を見てみると、他にもなんと合計18箇所も記入されていた。そこで、まずは、逐一、その解説を試みたところ、以下の通り解説できたので、整理番号（ ）付きで列挙しておこう。

- |         |                |           |                |
|---------|----------------|-----------|----------------|
| (1) 34裏 | neis ex quibus | (10) 110裏 | corax          |
| (2) 42裏 | radices        | (11) 118裏 | a lacu penarum |
| (3) 50裏 | tuorum         | (12) 126裏 | Deus           |
| (4) 58裏 | et pacem       | (13) 134裏 | septiformem    |
| (5) 66裏 | gloria         | (14) 142裏 | Quia           |
| (6) 74裏 | Christum       | (15) 150裏 | exurge         |
| (7) 82裏 | introduxit     | (16) 158裏 | non avertas    |
| (8) 90裏 | speret         | (17) 166裏 | memor          |
| (9) 98裏 | non erit       | (18) 174裏 | tor meus       |

以上18箇所の単語や略語について、学芸員から「これを繋いで文章化すれば、本書の注文主や、製作者の暗号名とか、製作の背景説明とかを示す文章になるのではないか」等々、期待あふれる自由な発想、アイディア等が出された。いろいろ検討を重ねていくうちに、ふと私は上記(10)110裏の“corax”（コーラックス。鳥の「カラス」の意。発音が似ている!）という単語に見覚えがあるのに気が付いた。実は、その数日前に、原文照合作業で『ヴルガータ版聖書』でチェックした「詩編」中に出てきた単語で、頭に「夜の」を意味する、“nicti-”，という別な単語が付いていたので「闇夜にカラスか!？」と連想し、メモしておいたのである。次に(13)134裏の、

“septiformem”，という形容詞も「(聖霊の)七つの……」との関連で出てきたことも確認済みであった。さらに、これらの単語等はたいてい「8頁ごと」に登場していることに注目し、一つの仮説を立ててみた。つまり、これは2倍サイズの用紙を「2枚づつ」重ねて二つ折りにして8頁分を予め作っておいて、左の外側・オモテから1頁目とし、ウラを2頁、と順に記入していけば最後の外側が8頁(最終部)になるので、その8頁の欄外・下に次の束(9~16頁)に続くのを明確に示すための工夫として、9頁の冒頭の単語を8頁の欄外・下に記入しておいたのではないかと考えたのである。では、一つ一つ、その該当箇所をチェックしてみようということになった。胸躍る思いで、実際に、調べてみた。まさにその通りであった!! 最初の(1)34裏の変な単語，“neis ex quibus”，は35表の最上部に、ちゃんとそのまま記載されていたのである!! 確かに，“neis”，というラテン語単語はないが、これは「象牙」を意味する形容詞，“eburneis”，の後半4文字部分であった。また、(9)98裏から次の8まで加算すると106裏となるはずが、原版の(10)110裏では、8間隔ではない。恐らくこれは、この部分で、「大きな束ね方」(8の倍数)の前半部分が終了し、後半の「大きな束ね方」が新しくそこから始まっているためにズレが生じたのであろう、と推論した。とにかく、この「仮説」や推論に基づいて、最初から最後まで、上記の18か所全部、確かめて見たところ、18か所とも見事に全部、きちんと合致したのである!! こうして、3人の勉強会では、連想をたくましくし、知恵を出し合って(?),「新発見の喜び」を共に分かち合うことができた次第である。その後もさらに、この資料の研究は続けられている。思いがけない、さらなる新発見がまたできるかも知れないという「かすかな希望」を抱きながら……。

## 6. 時課の構成、「朝課」の例。

紙面の都合で、ここでは「受胎告知」の挿絵が扉(27表)になっていて、そこから始まる一日8回の時課の最初の祈りに相当する「朝課」(27裏~46

裏まで)だけを実例に取り上げて、解読できた当時の「聖務日課」中の「朝課の構成」を整理番号( )付きでまとめてみた。以下の通りである。

- (1) 「受胎告知」の挿絵の下は、すべての「聖務日課」の「最初の祈り」の唱句。  
(司) “Domine, labia mea aperies.” 「神よ、私の口を開いてください。」  
(答) “Et os meum annuntiabit laudem tuam.” 「私はあなたを賛美します。」
- (2) 「交唱」(Antiphona): “Ave Maria.” と詩編 94 が続く(文章は省略する)。
- (3) 「賛歌」(Hymnus): “Quem terra.”
- (4) 「交唱」: “Benedicta tu.” と詩編 8 が続く。
- (5) 「交唱」: “Sicut myrrha” と詩編 18 が続く。
- (6) 「交唱」: “Ante thorum” と詩編 23 が続く。
- (7) 「交唱」: “Specie tua.” と詩編 44 が続く。
- (8) 「交唱」: “Adiuuabit.” と詩編 45 が続く。
- (9) 「交唱」: “Sicut laetantium.” と詩編 86 が続く。
- (10) 「答唱」: “Diffusa est.” と “Propterea benedixit.”  
記念日や土曜日には別の「交唱」: “Gaude Maria” と詩編 95 が続く。
- (11) 「交唱」: “Dignare me” と詩編 96 が続く。
- (12) 「交唱」: “Post partum.” と詩編 97 が続く。
- (13) 祈りの言葉。キリエ・エレイソン等、主の祈り、祝福の祈り。
- (14) 「第一読書」旧約聖書・集会書(24, 7~12)より。その後「答唱」
- (15) 「第二読書」旧約聖書・集会書(24, 15~16)より。その後「答唱」
- (16) 「第三読書」旧約聖書・集会書(24, 17~20)より。その後「答唱」
- (17) 「答唱」: “Ora pro populo” および “Quia ex te”
- (18) “Te Deum.” (神を賛美する歌。……美しいグレゴリオ聖歌の CD がある。!)

以上で「朝課」の式次第、終わり。ただし、1972年の大改訂では「賛課」

という名称が「朝の祈り」に、「一時課」は廃止、「三・六・九の各時課」は「昼の祈り」として一つにまとめられ、「晩課」は「晩の祈り」に、「終課」は「寝る前の祈り」にそれぞれ変更になった。そして、この「朝課」も「読書の聖務日課」(Officium lectionis)と改称され、中身も大幅に簡略化された。「読書」としては、聖書の他に、神学者の教説(説教・論文等)や、第2ヴァティカン公会議の公文書等も導入されて、毎日、別な箇所を読むことになり、改訂前と比べ物にならないほど、豊かな内容になった。ただし、日本語版では、「読書」の部分のちほど別冊『毎日の読書』(全8巻)として出版されたので、新しい『教会の祈り』(全1巻)には含まれていない。

## 7. 『時禱書』の解説結果を踏まえて。

この度、はからずも古川美術館より『小・時禱書』に関して、解説依頼を受けた。このことが契機となり、本書全体について徹底的な研究を行うことになった。そこで、私はこれまで長年蓄積してきたラテン語の知識、毎日実践している「聖務日課」の祈り等を利用し、この正体不明の小さな稀少本とがっぷり四つに組んで、総力をあげて解説作業を続けた結果、ほぼ全貌を解明することができたと思っている。今回の解説結果を踏まえて、この『小・時禱書』に関連して、カトリック教会の立場から、敢えて私なりに考えたり、感じとったりしたことを述べておきたいと思う。

まず第1点としては、この『小・時禱書』全体の内容とその受け取り方である。前述した通り、この『小・時禱書』は全体として、「絵本」でもないし「美術作品集」でも「カタログ」でもない。「祈禱書」である。そこで、『小・聖務日課』<sup>(10)</sup>であるという観点を忘れたら、話にならないし、わざわざ特別展で展示する意味も薄れると思う。私設美術館の場合、おのずと設置理由等からくる使命と限界があること位は承知しているつもりであるが、研究・解説した資料等を提供する度に受けた私の印象は、最初から最後まで変わらず、挿絵にこだわり、その「絵画・芸術・美術的特徴」のみ

を強調する立場を取っていたことである。だが、この『小・時禱書』は「祈禱書」である。全体は182枚で、挿絵は12枚（全体の約15分の1程度）に過ぎない。その製作者の特定とか芸術的な技巧、細密画の中身の細々とした説明（例えば挿絵「聖母戴冠」中の栄冠授与者は「キリストか父なる神なのか」、「祈るダビデ王」の挿絵中の、「ヒゲのおじいさんはキリストなのか父なる神なのか」、「その前にいる9人の天使の名前は何か」等々の質問事項からしてみても）、挿絵にしか関心がないように見受けられた。「実物」を展示するならば、「全体像」をバランスよく展示する義務がある。そうでなければ、何か妙な展示になってしまうのではないか。失笑を招くような展示や枝葉末節的な説明だけは、くれぐれもしないように気をつけてもらいたいと思う<sup>(13)</sup>。

第2点としては、すでに述べた内容もあるが、具体的な事柄をまとめてみよう。

- (1) 「この本の製作者や注文主、パトロン等を暗示するようなラテン語文や暗号、肖像の類」は、複数の学芸員が表明し期待していたが、本書中の、文章にも、挿絵にも、どこにも見当たらないこと。
- (2) カレンダー部分を除いて、本書中のラテン語文はほとんどすべてが「聖書や祈り」の言葉である。ただ、所々、本文中に「赤い文字」で挿入された部分は、“Rubrica”，「典礼注記」と呼ばれる「注意事項」である。「12枚の挿絵の説明文」はどこにも、一言も記載されていないのである。
- (3) 美術史的な観点を固守する古川美術館と私の立場とが最も違うのは、おそらく、この『小・時禱書』内の「挿絵12枚」の受け取り方にあると思う。そもそも「祈りの本」に、いちいち挿絵の説明文など入れないというのが私の見解である。この程度の挿絵なら、信者なら見ればすぐわかるはずで、説明文など入れる必要もない。実際、最近の日本語版の新しい『教会の祈り』には挿絵など1枚も入っていない。仮にも「美術史的な説明文」を加えたりしたなら、たいへんな「祈り

の妨げ」になってしまうので、もはや「祈禱書」とは別な代物になってしまう。しかし、古川美術館としては、「この挿絵 12 枚」をどうしても美術史的な観点から説明したいのである。そのことも理解できないわけではない。「祈禱書」や「古文書」を所蔵者が、骨董品として展示し、どのようなかたちで中身を取捨選択し説明しようと、勝手であると言えば、それまでであるが……。

第 3 点としては、「文と絵の主従関係」を正しく把握しないと「本末転倒」になるということ。「挿絵 12 枚」は美術史的にみて、芸術的な価値があると認めることができる。しかし、本書は「祈禱書」で、各時課の祈りの文章が「主」である。挿絵の存在そのものは、頁数を打つ習慣がまだなかった時代の本書では、各時課の祈りの初めを示す「扉」、区切りの「しおり」の役割（「従」の役割）を果たしているに過ぎない。従って、「挿絵の解説」のみに終始する展示方法を、もしやたとすれば、それは枝葉末節部分を強調した「本末転倒」の滑稽なものになる。これでは、格言にあるように来館者も「木を見て、森を見ない」ことになり、彼らに誤った印象を与えかねない。ちょうど西洋の大聖堂内の「ステンド・ガラスの装飾」がきれいで美術史的にみて芸術的な価値があるからといって、そればかりをカラーで写して詳しく説明してみても、キリスト教の「祈りの場である大聖堂の意味」について触れなければ、「窓」の説明にはなっても「祈りの家」全体の説明にはならず、中途半端な解説になってしまうのと似ている。それでは、現代美術館の教育的使命を十分に果たしているとは言えないのではなかろうか<sup>(11)</sup>。

## 8. カトリック教会と「祈りのかたち」。

この際、カトリック教会と「祈りのかたち」について、よい機会なので、私見をまとめて述べてみたい。実に、「祈りのかたち」を尊重するカトリック教会は、その創設以来今日に至るまで約 2000 年間、世界中の信者と共に、創造主であり救世主である「父と子と聖霊」即ち「三位一体の神」に、毎

日、賛美と感謝の祈りを捧げ続けてきたのである。その「祈りのかたち」は2つある。即ち、(1)世界中で毎日捧げられている、キリストご自身が制定した「ミサ」とか「感謝の祭儀」と呼ばれる「聖体祭儀」(そのためには分厚い『ミサ典礼書』、ラテン語版では「通常文・年間固有文」1巻、「年間・祝日用朗読聖書」3巻、合計4巻セットがある)、そして、(2)公けにも私的にも、毎日、神に賛美と感謝し、朝・昼・晩・夜などの各時間帯を通して日々の聖化をはかるための「聖務日課」がそれである。このためにも分厚い「聖務日課」(ラテン語版、全4巻、6000頁)と呼ばれる「祈禱書」がある。教会はこの「ミサ」と「聖務日課」の両者を車の両輪のように大切にしてきた。ピオV世、クジストV世、クレメンスVIII世、ウルバノVIII世、クレメンスXI世、そしてパウロVI世など各教皇によって、「聖務日課」は何回も改訂を重ね、時代に即したよりよいものにする努力が払われてきたのである。個人的にも使用できる縮小サイズの「ミサ典礼書」や「小・聖務日課」等の製作普及を認め、聖職者にも一般信者にも、つねに祈ることを奨励してきた。そして今も毎日の祈りを大切に、奨励しているのである。従って、単純に「祈りのかたち」という表現で、他の宗教や信心業と比較してみても、その生活態度も考え方も実践方法も全く違うので、美術史的な捉え方だけで、信仰を前提にしないで追求してみた場合、カトリック教会の「祈りのかたち」は複雑に映り、理解に苦しむことはあり得ることだと思ふ。

しかしながら、“Ad Maiorem Dei Gloriam!”、「神のより大いなる栄光のために!」(イエズス会創立者・聖イグナチオ)の言葉に代表されるように、神の栄光を賛美するためにこそ、熱心な信仰の持ち主たちは、政治・経済・社会・文化・教育・医療等、あらゆる分野で自分の能力を使って活躍し、他方ではインスピレーションに刺激されたり励まされた芸術家たちは心血を注いで働き、その結果、音楽・絵画・彫刻・美術品・祈禱書・大聖堂等、数々の「キリスト教的」と名の付く芸術・美術・建築関係の傑作を生み出してきたと言っても過言ではない。このように、三位一体の神に

対する信仰、賛美、感謝の心が、すばらしい作品を完成させたことを、当時の人々の信仰面や精神面を理解しなければ、大切な観点が欠落してしまう。キリスト教関係の美術・芸術作品等を理解するためには、信仰やラテン語の知識などを前提にしなくても、ある程度はできるかも知れないが、根本的な認識不足が避けられないし、断片的な説明で終わってしまうこともある。

また、カトリック教会の「祈りのかたち」の基本として、教会では昔から共同で祈る場合、「ミサ」でも「聖務日課」でも、原則として歌うことと定め、そのためにラテン語の美しいミサ曲等の「グレゴリオ聖歌」、それと並行して各国語による「典礼聖歌」が世界中で実にたくさん生まれた。今もなおCDなどでそれが一般向けにも販売され、信仰の有無を問わず、多くの人々に心の糧、魂の安らぎを与えているのである<sup>(12)</sup>。

この度、たった1冊の西洋の中世ラテン語写本、“HORAE”、『小・時禱書』即ち『小・聖務日課』の集中的な解読研究作業をやってみて、やはり「カトリック教会の宝」である伝統的な美しい「祈りのかたち」が脈々と受け継がれて今日に至まで守られてきたことを発見し、伝統の重みと共に祈りのすばらしさを再認識した次第である。

### おわりに：本書の全訳出版に向けて。

今回の古川美術館所蔵の『小・時禱書』との不思議な出会いを契機に、本書の「全訳出版」に向けて、今後もじっくりと時間をかけて、研究活動を続けていきたいと思う。こうした地道な研究活動の実りが、将来の古川美術館の来館者や多くの日本人に、この『小・時禱書』の真価を総合的に正しく評価し、キリスト教の「祈りのかたち」をより深く理解する一助となれば幸いである。今回は印刷物編集等の時間的な制約上、1995年9月末の時点で、取りあえず「全体像について」、従来の美術史関係の書物等の説明では見落としがちであった点などの批判も含めて、解読できた内容を総合的に紹介しておきたいと思った。なお、「カラーの挿絵12枚」に興味や



関心のある方は、古川美術館を訪れ、実物をゆっくり鑑賞されるように、おすすめしておきたい<sup>(14)</sup>。

終わりにあたり、この度、この『小・時禱書』について解説作業・初挑戦の機会を提供して下さった古川美術館をはじめ、「新発見の喜び」を共に味わった同美術館・学芸員の皆さん、そして、数々の貴重で、必要不可欠な参考文献等を快く貸して下さった方々、およびその都度、調査・助言等をもって協力して下さった方々に、心から感謝とお礼を申し上げる次第である。

1995年9月末日 名古屋にて

著者

## 注

1. 古川美術館。財団法人古川会。故古川為三郎氏収集の美術品の寄贈を受けて1991年に開館。所在地：名古屋市千種区池下町2-50（TEL 052-763-1991）。  
休館日：月曜日、年末年始、展示替の日（月曜が休日にあたるときは、その翌日）。  
今回の解説資料に関する覚書：
  - (1) 研究対象物件名：通称，“HORAE”，『時禱書』と呼ばれる写本1冊。評価額4000万円也。
  - (2) 別称：『ブシコー元帥の画家の時禱書』『ブシコー派の画家の時禱書』とも。
  - (3) 使用言語等：ラテン語（手書きのゴシック字体）、182枚（裏表364頁分）。
  - (4) 製作者：フランドル派の写本装飾画家（12枚の極彩色・挿絵入り）。
  - (5) 製作年代：15世紀初頭（推定1412年頃）。製作場所：フランス（パリ）。
  - (6) 写本解説の依頼主：財団法人「古川会」経営の古川美術館（名古屋市）。
  - (7) 写本解説の依頼状：1995年8月17日付発信。
  - (8) 写本解説・研究期間：1995年8月19日～9月30日（約43日間）。
  - (9) 特別展の期間：1995年11月3日～1996年1月28日（古川美術館）。
  - (10) 「特別展」の「しおり」———（原稿、1995年9月21日付、）———

「洋の東西を問わず、人びとの「祈り」は様々な造形を生み出してきました。天使の言葉に驚いて振り返るマリア。キリストの誕生を予告するこの出来事は、美しい絵画となってわたしたちの心を魅せつづけています。この場面をはじめとした

12枚の細密画が華麗さを誇る『ブシコー派の画家の時禱書』は、西洋中世の人びとの祈りを、手のひらに載るほどの小さな本のかたちで結晶させたものです。今回はこの『時禱書』を中心に、キリスト教のもとで花ひらいた彩彫写本の世界をご紹介します(以下省略)。

2. 「時禱書」, 「ブシコー元帥の画家」, 「ブシコー派の画家の時禱書」の項については、以下の文献参照。(1)『世界美術大事典』小学館 1989, (2)『西洋絵画作品辞典』三省堂 1994, (3)『新潮世界美術辞典』新潮社, (4)『西洋の美術——その空間表現の流れ』国立西洋美術館 1987『図録』等。

『時禱書』の製作者や注文主に関しては諸説がある。1455年初めて「42行聖書」の活版印刷を始めたのがドイツのグーテンベルグ(Gutenberg 1400年頃~1468年頃)であるが、その活版印刷技術発明直前の、15世紀初頭、フランス・フランドル地方には、カトリックの「時禱書」作りに活躍した写本装飾画家たちがいた。高価な手作り写本は量産できず、注文制だったようだ。本書の注文主は、一説によれば、ジャン・ル・マングル夫妻(Jean le Meingre, 1367年没。別名ブシコー-Boucicautと呼ばれ, “Marshal of France”, 「フランスの元帥」), およびその妻アントワネット・ド・チュレンヌ(Antoinette de Turenne)であったとする。従って、本書の製作担当画家名が、ブシコーなのではない。このブシコーという名は、上述の元帥の「別名」であり、またその息子Jean II(ジャン二世, 1366~1421年, シャルルVI世より、後に「フランスの元帥」に任命されている)にも付けられている(Cf. “Boucicaut”, “Jean le Meingre”, *WEBSTER'S NEW BIOGRAPHICAL DICTIONARY*, Merriam Webster, 1983.)。製作者名は、一説によるとジャック・ケーヌ(Jacques Coene, 1398年イタリア・ミラノ大聖堂で働いていたことが確認されている人。ケーヌとも表記される)であるという。

他の説によれば、当時の写本装飾画家や工房がブシコー元帥(家族を代表)の庇護の下にあったという理由から、『ブシコー派の画家の時禱書』いう表記が使われている。古川美術館では、後者の立場を取っている。私見であるが、『ブシコー派の画家の時禱書』という名称は、美術史関係では慣用句なのかもしれないが、以下の理由で、即ち、(1)「フランドル派」という画家のグループ名はあるが、ブシコー派という画家のグループ名はないこと、(2)「……派」というと、キリスト教関係では「ルーテル派」のように、ある教会教派名の固有名詞的な印象を与えかねないので、この写本の紹介名としては適切ではないと思う。

また他の説によれば、本書の「注文主はアヴィニョン近辺在住の聖職者と推測されるが不明」とある。その典拠としては2件一括して末尾に記載されているだけで、どちらの資料からなのか特定できない。Cf. MEISS, M., *French Painting in the Time of Jean de Berry, Boucicaut Master*, New York and London, 1968, p. 135, pls. 124, 249-50.; PANOFKY, E., *Early Netherlandish Painting: Its Origins and Character*, 2vols., Cambridge, Ma, 1953, I, p. 54, n. 1. 以上2件の資料が、古

川美術館より受け取った、8月29日付『時禱書』に関する収集資料中に「重要参考文献」として末尾に掲載されているが、この記事の作者名は不明（1995年9月勉強会で検討済み）。

当時の西洋諸国の状況。特筆すべき事件はフランス国王がフランス人の教皇を立て、1309～1378年頃まで、教皇座をローマより南仏のAvignonに移動したこと。この事件は「アヴィニョンの幽閉」とも呼ばれている。やがて、ローマに戻った教皇に対して、フランスでは対立教皇が立ち、「教会大分裂」という異常事態(1378～1417年)を招く。他方、ドイツでは宗教改革(1517年)がカトリックのオウグスチノ修道会司祭マルチン・ルーテル(1483～1546)にって、まだ行われておらず、従ってその後の「新教の教会教派」は、まだ一つも存在していない時期であった。

日本はと言えば、平安・鎌倉時代を経てその頃は足利義量(あしかが・よしかず、1407～25年。室町幕府5代将軍。19歳で病没)の室町時代であり、キリスト教の由来(1549年フランシスコ・ザヴィエル)の、はるか140年も前のことである。

3. 用語は時代と共に変わっていくが、カトリック教会用語では「時禱書」などと言う訳語は、昔も今も、聞いたことがないし、カトリック教会内では使っていない。どこかで誰かが使用したこの訳語が、美術史関係では勝手に独り歩きをしているらしい。最近、美術事典の中には、ちゃんと「聖務日課」という用語を使っているものも見受けられるようになった。とにかく、1972年、ローマより大改訂版が出されたのを契機に、今後は、『時課の典礼』(書)とか、せめて上記の通り「聖務日課」または『教会の祈り』(新しい「聖務日課」の訳・編本としてカトリック教会が現在使用している用語)を使ってもらいたいものである。
4. この箇所は、“Sub tuum praesidium”で始まる「天主の聖母のご保護によりすがり奉る」という祈りの一節で、私もかつて「グレゴリオ聖歌」で歌ったことがある。日本語(文語体)の祈りもあった。「……必要なる時に呼ばわるを軽んじたまわず、かえってすべての危うきよりわれらを救いたまえ」の下線部分が該当箇所の単語である。
5. 疑問箇所等については逐一、(1)聖書関係は、本書の原文とラテン語の『ウルグータ版聖書』で照合し、(2)聖歌や祈願文などは、a) “*Liber Usualis*” (1962), 『グレゴリオ聖歌集』(ラテン語); b) “*Manuale Christianum*”, 『キリスト信者必携書』(1946年, ラテン語版のみ), そして、(3) 人名については、a) “*Martyrologium Romanum*”, 『ローマ教会殉教記録』(1922年ローマ, ラテン語版); b) “*Calendarium Romanum*” (Vatican 1969年, ラテン語版); c) “*The Oxford Dictionary of Saints*” (Oxford Univ. Press. 1992); d) *WEBSTER'S NEW BIOGRAPHICAL DICTIONARY*, Merriam Webster, 1983. 等を利用して照合し、正誤を確認したあとで訂正し、その一部をここに紹介した。
6. 光明社出版の日本語版は、1930年、43年、50年、51年、55年、61年と6回ほど出版されている。現在は絶版。『童貞聖マリア小聖務日課』(1951年)は赤・黒二色

刷の「ラテン語・日本語対訳」（ラテン語が右頁・横書き、日本語が左頁・縦書き）である。『処女マリアの小聖務日課』（増補版、黒一色刷、後半の一部は対訳ではない、1961年）では、内容が大幅に改訂増補されている。両者の名称も『童貞聖マリア……』から『処女聖マリア……』というふうに変わっている。時代と共に、“VIRGO”の訳語も「童貞」→「処女」（しよじょ）、そして現在では→「おとめ」（新共同訳聖書参照）と漢字も読み方も変わってきた。

ところで、『聖マリア小聖務日課』（英語：“Little Hours of the Virgin”）は10世紀頃から、通常の「聖務日課」に追加して、聖職者も一般信徒と同様に、自主的にこれを唱える習慣が生まれた。このことに関しては、“Book of Hours” cf. “*Dictionary of Christian Art*”, Diane Apostolos-Cappadocia, 1994 参照。今回の研究対象となっている『時禱書』と日本語版『聖マリア小聖務日課』とは、いずれの版のものも、全く同一のものであるとは言えないが、「交唱」「詩編」等のテキストがいくつか同じか似ている程度である。むしろ、よく似ているのは、『キリスト信者必携書』のほうである。詳しくは脚注10参照。

7. 第2ヴァチカン公会議が議決した、合計16の公文書の一つ『典礼憲章』は、最初に議決され、種々の典礼改革の基本となった。中でも、積極的・行動的な典礼参加を促すために、対面形式のミサを導入したり、典礼上の祈願文や聖歌等の使用言語が従来は世界中ラテン語で統一されていたが、以後、自国語で行うことができるようになった点が極めて顕著な変更点である。「聖務日課」に関する改訂については、『典礼憲章』第4章83~101番に詳述されているので、その部分を参照されたい。
8. ちなみに、現在でも、一部改訂されているが、この定時の祈りを続けている修道院が日本にもある。例えば、函館の「トラピスト修道院」がそうである。昔、私も司祭叙階後間もなく、1970年夏に数日間滞在し、早朝よりの厳肅な祈りと沈黙の生活を体験したことがある。1995年夏、約1か月間そこで、修道者と全く同じ生活をしながら修行してきたザビエル神学生（インド出身）の体験談によれば、現在の「朝課」の時刻は、早朝3時からだ！その後また休んでから再び起床、「賛課」、そして中心的な「ミサ」に続く。一日の仕事等すべてを終えて、最後を締め括る「終課」は夜8時、その後、直ちに就寝するのである。朝がととても早いので、夜寝るのも早い、こういうスケジュールで心身の健康管理も十分考慮されているようだ。
9. 従って、この「カラー挿絵12枚」は、たとえ芸術的に、細密画として価値があるにせよ、本書の「主要部分」であるとは言えないのである。にもかかわらず、「絵」だけを解説するような取り扱い方は、笑止千万だ。おかしくて仕方がないついでに、おかしな「駅弁」の譬えて説明してみよう。本書の「絵と文（祈り）の関係」は、言ってみれば、「駅弁のフタ」と「中身」の関係みたいなものだ。フタには「名古屋城のカラー挿絵」が付いていると仮定しよう。その挿絵の「天守閣の金の鯨」には金が塗ってあり、絵柄も著名な芸術家の価値のある作品（コピー）であったとしても、フタはフタであって、食べるものではない。中身の御飯やおかずを食べなければ

ば、駅弁の味は分からない。本書の挿絵は「駅弁のフタ」に相当する。フタの挿絵ばかり注目しても、中身の「御飯やおかず」に相当する「ラテン語の祈りの言葉」を味わって見なければ、駅弁を食べたことにはならない。つまり、本書の「中身」をじっくり味わって見なければ、いくらフタに注目し、フタを評価してみても、この『小・時禱書』の真価はわからずじまいである。こんなことを言ってしまうと「身もフタもない話」になるか。

10. 内容がよく似ている点で、『小・聖務日課』も網羅した「クリスチャン・マニユアル」と英訳もできる『キリスト信者必携書』，“*Manuale Christianum*”，であると言ったほうがよりぴったりあてはまる気がする。私は修練期以来30年以上もこのラテン語版“*Manuale Christianum*”『キリスト信者必携書』を受用しているが、全体は3部構成になっている。

第I部：「イエス・キリストの新約聖書全27巻」（657頁）

第II部：聖職者用の祈り：(1)「聖マリア小聖務日課」、(2)「痛悔の七詩編」

(3)「諸聖人の連禱」、(4)「各種の祈願文」、(5)「ミサ通常文」

(6)「感謝の祈り」（合計201頁）

第III部：“*De Imitatione Christi*”（221頁）、『キリストに倣いて』

（トマス・ア・ケンピスの名著、何冊かの邦訳本あり）。

古川美術館所蔵の『時禱書』と内容と比較してみると、第I部の「新約聖書」は抜粋掲載ではあっても4か所あったし、第II部は、(1)、(2)、(3)、(4)、と、[(5)と(6)は除いて、]大部分が掲載されていた。第III部は掲載されていなかった。また大きさも167×120ミリ。364頁で「手のひらに載るサイズ」と「しおり」にあったが、『キリスト信者必携書』はそれよりもコンパクトなもので、「ポケット・サイズ」とでも言うべき本（120×70ミリ。1700頁位。ノ）である。

11. 門外漢の蛇足かも知れないが、現代美術館の教育的使命についても考えてみた。最近、「開かれた美術館が『教育』を創造する」（朝日新聞、1995年9月18日付）という長田謙一助教授（千葉大学・芸術学専攻）の論文が目にとまり一読、次の箇所共鳴した。彼はこう述べている。「……来館者たちに古今の美術作品などとの出会いを用意することが美術館の中心的な役割であるとすれば、美術館それ自体が、本質的に「教育・普及」的なのである。例えば美術理解の更新を目指す意欲的な企画展は、それ自体「教育・普及」的問題意識に貫かれるであろう。逆に、大衆化した特定美術傾向への偏愛におもねた展示は、いかにも「教育・普及」活動を随伴しても、失笑を誘うだけであろう（以下省略）。彼の言う、「教育の創造」が現代の美術館・博物館一般の使命であるならば、古川美術館も私設美術館として、小回りが効くはずで、「美術理解の更新を目指す意欲的な企画展」を計画してもらいたい。特別展開催の名の下に、ただ所蔵している稀少価値の骨董品を順次入れ替えながら、従来美術史の慣用句的な説明文にこだわって陳列して「事足れり」とするだけでは、今後の発展も期待できないので、いただけない。何か新しい発見とか、意欲的な研

究成果を発表する場として、来館者に教育的な刺激を与える場になってもらいたい。信仰を前提にしないで、祈りや「祈りのかたち」などという宗教的価値のある物を正しく理解するように来館者を導くことは、かなり難しいかも知れない。美術館側の学芸員たる者は少なくとも、キリスト教関係の著作や芸術・美術作品一般についても、正しい認識を持って、実物を「本来の姿」で、正確に提示するように心掛けてもらいたいと思う。

12. “Core de manjes del Monasterio Benedictino de Sancto Domingo de Silos.”

「サント・ドミンゴ・デ・シロス・ベネディクト会男子修道院合唱団」のCD：“CANTO GREGORIANO”（1973年）参照。近年、このたった1枚の「グレゴリオ聖歌」集のCDが、全世界で380万枚以上も売れ、一時、大ブームになった。だが、「世界人口55億中、カトリック信者は約9億だから、そんなの大したことはない」などと講釈すれば、それまでだが、「時代を超えて価値あるものは何か」について、とても大切なことを物語っていたような気がする。

実は、日本のカトリック教会では、「ラテン語の祈り」や「美しいグレゴリオ聖歌」など伝統的なものの使用を30数年前の典礼改革の時に、「わからない言語だから」、「古いから」とかいう単純な理由で、あっさりと（？）あきらめ、聖堂内から捨て去ってしまった。仏教のお経も分からない点では同じだと思う。しかし、『典礼憲章』第6章116番には、「教会は、グレゴリオ聖歌をローマ典礼に固有な歌として認める。したがってこれは、典礼行為において、他の同等のものの中で首位を占めるべきである」と規定されているのである。廃止されたわけではないのに、自然と使われなくなり、その当然の結果として、信者が歌えなくなって30数年たった昨今では、教会以外の場所を使って専門の音楽家やオルガン演奏家たちが「グレゴリオ聖歌のコンサート」を催す時代となり、皮肉にも、カトリック信者も、その価値を認める人々は、入場券を買って聞きに行くありさまである。

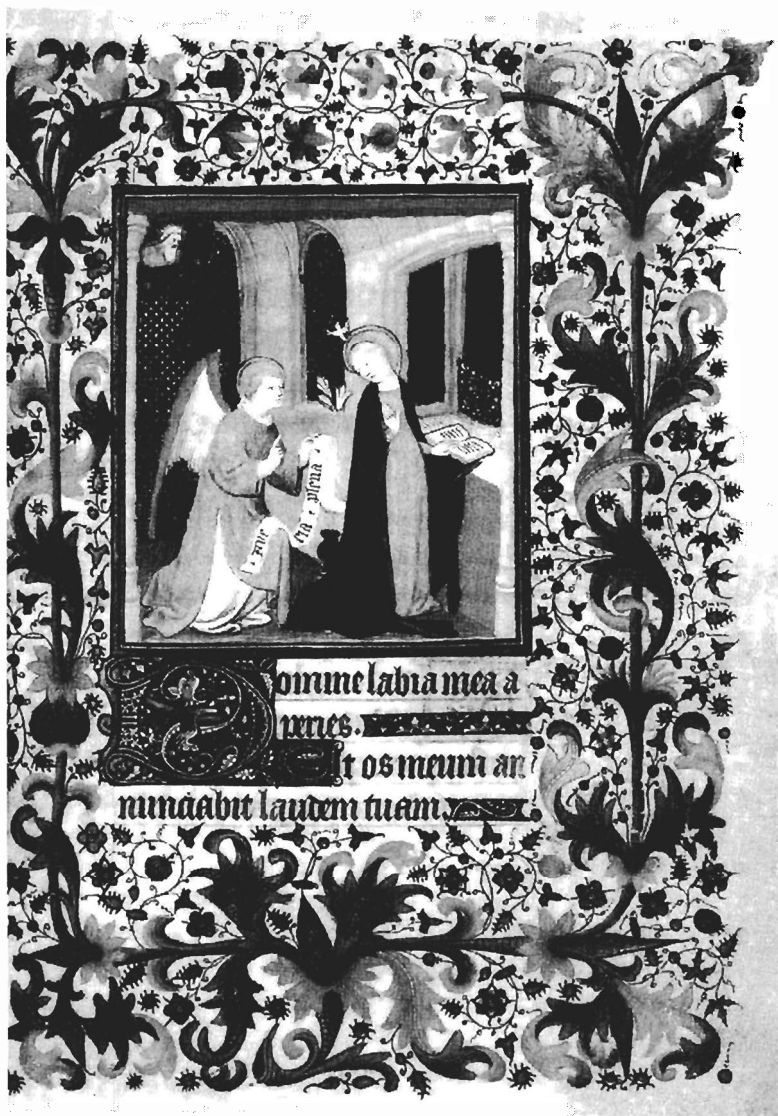
今回の特別展「祈りのかたち」も、見方によっては、似たような現象かもしれない。昔と言っても約30年ほど前の、私の学生時代には、教科書も授業も試験もすべてラテン語であったし、ラテン語の聖歌や祈禱書なども全く当たり前であった。時代の変化と共に、ラテン語の使用は減少し、ほとんどすべてが自国語になり、今日では、ラテン語などは貴重な過去の文献・資料か骨董品扱である。過去の貴重な文献、1冊の『時禱書』の評価額が4000万円也というのも驚きであったが、特別展でこれを展示し、入場料を取って一般公開というの、なんだか不思議な気がしてならない……。「ミサ」と「聖務日課」という2本立ての、伝統的なカトリック教会の「祈りのかたち」が、たった1冊のこの薄い『小時禱書』だけで、しかも挿絵の説明だけで、どの程度提示できるのか、さらにその提示物や説明を来館者がどの程度正しく理解できるのか、一抹の不安と危惧をおぼえる次第である……。

13. 開催中の「特別展」を11月中旬に見学、1階の「実物」や展示物、2階の「ハイビジョン」の解説も鑑賞した。本稿中の私の「予想」が的中していて、「やっぱり、

そうだったか。／」というのが率直な第一印象。即ち、『時禱書』全体の4%に過ぎない「挿絵12枚」一辺倒の展示で、96%に相当する。「聖務日課」の説明も展示も皆無に等しかった。これは「祈りのかたち」というよりも、「絵のかたち特別展」だった。具体的なことをいくつか述べておきたい。①実物の印象——手の混んだ、しっかりした装丁で、「実にいい仕事があるなあ。／」と思った。貸してあげた「グレゴリオ聖歌のCD」が会場を中世風の雰囲気にしてた。②冒頭のパネルに『時禱書』とは「……聖母への祈りを中心とする祈禱書のことで」という説明文があったが適切ではない。「聖母への祈りを伴って、父である神に賛美と感謝を捧げる祈りを中心とする祈禱書」と訂正したほうがよい。③拡大コピーの「カラー挿絵12枚」——「色がきれいですね。／」「500年以上経っても色褪せない絵の具って、何でしょうかね？」などと興味本位の私語を交わしながら絵に見惚れ、説明文を読んでいる人々もいた（本来「絵の説明文は不要。／」というのが私の立場。従って絵の説明文はすべて、学芸員が独自に仕上げたもの）。④「諸聖人の連禱」だけには何も説明文が付いていなかった（「説明文は必要。／」本稿15頁，4，6，(2)「諸聖人の連禱」参照）。⑤2階「ハイ・ビジョン」室の「祈りのかたち」の解説（15分位）——中世の写本作成風景（映画の抜粋）、パリの風景、アヴィニョンの教皇庁の全容なども紹介されていたが、ここでも写本制作や挿絵の詳細な説明が中心。「聖務日課」の中身やそれを祈る場面等は一つも出てこなかった。「興味本意の展示方法」による美術品としての『時禱書』を鑑賞して、私設美術館の限界を痛感、「絵はきれいだったが、本体の祈りはどこへ行ってしまったのだろうか？」と、素朴な疑問と物足りなさが残った。

14. 案内状を送付したところ、「特別展」を見学した方（女性60歳代、カトリック信者）から、次のような手紙をいただいた。

「……吉田神父様が300時間以上もかけて解説された内容は、とてもわかりやすく、見るもの、読むもの、ビックリすることばかり。「祈りのかたち」の祈禱書が『時禱書』であったこと、聖歌集『リーベル・ウズアーリス』の実物が1880頁もあるのにもビックリ。祈りはもともと目で読むのではなく口に出して唱えるもの、『時禱書』の祈りはすべて歌うことができることなど、手帳とペンを持って、3分の1位記録して帰りました。活版印刷が1450年に出来たことも、初めて知りました。いま、ラテン語の聖歌が教会内の典礼からなくなってしまい、残念でなりません。……ノートルダム大聖堂に行きました時に、3人の神父様がラテン語の聖歌を歌って祈りをしておられたことを、思い出しました……。感謝のうちに。S. T.(1995年11月17日付)」



『<sup>じとうしょ</sup>ブシコー派の画家の時禱書』より「<sup>じみないこくち</sup>受胎告知」